

# 方向

第一二三号 一九九〇年一月二四日 京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向 社

歌人・大塚五朗

(一四)

1990 11 23 原田憲雄

歌集『山原』出版

一九三二年 五郎、三十五歳。京都府立京都第三中学校教諭。

一月、三中の校歌が制定された。『創立六十周年記念号』は次のようにいう。

同(昭和)七年一月、本校校歌を制定し、且印刷に附して生徒全般に頒布せり。本校歌は、同窓生、在校生、及び職員より募集せる数種の稿案を参考資料とし、本校国漢担任職員の合評取捨と、校歌委員の採択精校とを経て成れるものにして、評校に供する原稿の作製は大塚教諭主として之に当たれり。歌曲は東京音楽学校教授信時潔氏に依頼して作成せられたるものなり。

同記念号に載せる校歌の複写は次頁に掲げる。原稿はたぶん前年の秋から冬にかけて作られたはず。先生の長男朗氏のもとに、桂の基盤があり、その裏面に次のように記されている由。

昭和七年二月、京都府立京都第三中学校から作詞記念として 贈大塚君

一九三三年が創立二十五年に当たるのでその記念事業の一つだったのであろう。レコードにも吹きこまれた。

京 三 中 校 歌

一、朝に仰ぐ秀嶺愛宕 夕に掬ぶ清流桂

京三 中 校 歌

大塚 五郎 作詞  
信時 深 作曲

本校園漢科作歌  
信時 深作曲

♩ = 約132

あしたに あおぐ しゅうれい あたご  
ゆうべに むすぶ せいりゅう かつら  
さんがし ぜんの れいきと うけて  
つどおー そおぬお けんじう せーんお  
お三 中 その 名 むね らがほこり

一、朝に仰ぐ秀嶺愛宕 夕に掬ぶ清流桂

山河自然の靈氣を享けて 集ふ双陵健児一千

おお三中その名ぞ吾等がほこり

二、誠実天の聖火とかかげ 剛健地の威徳とたたへ

崇文尚武ただ一途に 類ふ姿の雄々しさ著しや

おお三中その名ぞ吾等がまもり

三、道取不斷の光と持み 協力不壊の翼と翼りて

若き生命の日に新しく 理想の空ゆく羽音を聴けや

おお三中その名ぞ吾等がちから

四、歴史ははよ古き都に 練乱誇る校の靈氣

騰りてとはに祖國の幸を 拓かん吾等が大なる使命

おお三中その名ぞ吾等がいのち

山河自然の靈氣を享けて 集ふ双陵健児一千

おお三中その名ぞ吾等がほこり

二、誠実天の聖火とかかげ 剛健地(つち)の威徳とたたへ

崇文（しゅうぶん）尚武ただ一途（ひとすぢ）に 競（きは）ふ姿の雄々しさ看（み）よや  
おお三中その名ぞ吾等がまもり

三、 進取不断の光と侍（たの）み 協力不壊（ふえ）の翼と張りて

若き生命（いのち）の日に新しく 理想の空ゆく羽音を聴けや

おお三中その名ぞ吾等がちから

四、 歴史にはほふ古き都に 繚乱誇る桜の徽章（しるし）

護りてとはに祖国の幸（さち）を 拓かん吾等が大なる使命

おお三中その名ぞ吾等がいのち

三月、寄宿舎の舎監を命ぜられ、太秦安井から右京区花園馬代町三番地の三中公舎に移転する。公舎は校地の東北角に、北から南に三軒、同じ構えで、西の運動場に向かって並び、北は岩見護、中が田中九三、南が五郎の住宅である。家賃がいなくなったので、妻の松子はその分を五郎の歌集を出版すべき費用に当てることにする。  
〈※舎監の就任とそれにもなう住居の移転は、あるいは前の年の一九三一年だったかもしれない〉

四月には長女喜子（のぶこ）が御室小学校に入学する。この前後に、長兄広通の長女で、松子の弟萩原健雄の妻となり、神戸に住んでいた三七子が死去する。

六月十日、第一歌集『山原』を刊行する。その書誌を次にしるす。

箱は、簡単に、背に別の紙で「歌集（この二字は横書）山原 大塚五郎」と印刷したものを貼り付けたもの。



京都市上京区下立売通猪熊下ル

印刷所 野村製版印刷所

京都市上京区丸太町堀川西入

発売所 星野書店

本稿(七)一〇頁に引いたものに続く「巻末手記」

山円く水清らかな京都の風物は涸れ果てた私の心にも一脈の豊かさと明るさを注ぎ込んでくれた。それに岩見護氏、森永義一氏、山村湖四郎氏といった同じ学校に勤める人々の心からなる激励と鞭撻に逢つて作歌的心境を立直しかけたのである。思へば温い友情程有難いものはない。実をいふとこの歌集を編まうと決心したのもそれら友人の助言と後援が与つて力あるのである。もう一人この歌集出版に就いて早稲田時代からの友立野信義君も忘れてはならない後援者であるのである。それ等の人達に今更めてまた感謝を捧げたい。この後私は京都にいつまで居るかわからないし、また今後かうした歌集を再びだせるかどうかともわからないけれど、このうつくしい京都の地に於て記念塔を建て得た事は何といつても喜ばしい限りである。

しかし、その喜ばしさの中にもかうして歌稿の整理をしてゐると何ともいへない水のような寂しさが心をひたして来る。それは過去に甘える気持であらう。その寂しい空気の中にぼつかり浮かんで来る二人の人は私にここに書いておかなければならない。その一人は天野多津雄氏であり、もう一人は吉井八恵子氏である。この二人の人は私の福島在住時代に深く内面生活に交渉を持つた人達で、特に吉井氏は私の一生を通じての

心の友達であるだらう。かうした或一部分の人にしか関係のない事は、或は書くべき事柄ではないかもしれないけれど、私にとつて始ての記念塔を建てるに就てはどうしても書きとめて置かねばならない止み難い心持がするのである。

この校正の半にして私はとうとう姪の長逝に接して了つた。或時<sup>ハ</sup>近く、或時は遙かなるものやうに考へられてゐた『死』といふものをこの位近々と感じたことはない。

病中に一度見舞つた時、この歌集の話が出て——一日も早く出版されることを待つてゐる——といつてゐたが、遂に間に合はなかつた。姪のつれあひは私の妻のたつた一人の弟なのであるが、その弟もこの歌集を見てまた思ひ新たなるものがあるだらうと思ふ。

京都もとうとう若葉の美しさで飾られてしまつた。五月に生まれる子は聡明であるといはれてゐる。どうぞしてこの歌集も五月には、と思つてゐたのであるが、もう五月も月半ばである。とても月一杯には覚束ないであらうが、兎も角もここまで校正を漕ぎつけていささかほつとしてゐるのである。

最後になつて失礼だけれど、装幀に就ては春華氏門下の逸足久保田春更氏を煩はした。勝手な注文ばかり申し述べたに係はらず快諾せられ、分に過ぎる装幀の出来た事、これまた感謝の外はない。

昭和七年初夏

洛西、花園にて

大塚 五郎

文中の「春華氏」は、日本画家の山元春華（一八七一—一九三三）である。

九月二十五日、三男哲（さとし）生まれる。

中国の詩人と仏教

(一一)

1990 11 2

原田憲雄

一三、 応璩の百一詩と漢訳仏典

一二世紀の胡仔の詩論集『苕溪漁隱叢話』を讀んでいたら前集四一に『潘子真詩話』の次の話を引いています。

あるときひとりの旅人が

古有行道人

道で三人の爺に会うた

陌上見三叟

年はいずれも百歳あまり

年各百歳余

稲のシイナを鋤きとっていた

相与鋤禾莠

車を止めて三人に問う

住車問三叟

なんでそんなに長生きできたか

何以得此寿

はじめの爺がいうことにや

上叟前致詞

わしはつねづね腹八分目

量腹節所受

なかの爺がいうことにや

中叟前致詞

うちの婆はへチヤですけんね

室内嫗醜

あとの爺がいうことにや

下叟前致詞

寝るときは布団をかぶらない

暮眠不覆首

なるほど なるほど 三人の

要哉三叟言

爺のことばは長寿の秘訣じや

所以能長久

若いときには色艶よいが

少壮面目沢

ふけるにつれて汚くなる

長大色醜醜

汚くなるのは嫌なもの

醜醜人所惡

しらがを抜いて洗うてみたら

抜白自洗蘇

びっしり生えてた髪までぬけて

平生髮完全

坊さんみたいな姿に変わる

变化似浮屠

酒に酔うたら頭巾が落ちて

酔酒巾幘落

赤禿げ頭は壺にそっくり

禿頂赤如壺

これは応璩の「三人の爺のうた」だ。呉兢の『古楽府』や、『藝文類聚』にも載っているが、みな完全ではない。わたしはこの本を臨淄の晏公の家で手に入れた。：

話は以上ですが、応璩は、本稿（八）で紹介した曹植の「応氏を送る」詩にいう応氏兄弟の弟のほうです。この人について吉川幸次郎博士に「応璩の「百一詩」について」があり、読み返すと、詩の異文はもとより、諸書に散見する応璩の詩の断片にいたるまで集め、総合的に論じてあります。

応璩は、一九〇年に生れ二五二年に六十三歳で亡くなったようで、曹植を中心とする建安（一九一—二〇〇）の詩人た



ちとほほ同じ年配だが、詩人としての活動は二三九―二四九の十年間で、詩風も建安の詩人達とは著しく違っている。建安の詩は、緊張した場面における自己の心情の強烈・悲愴を、凝縮した文体でうたいあげようとするが、応璩の詩は、人間の世の複雑さを、弛緩した場面で批判的にうたい、その文体には次のような特徴がみられる。

- ① 俗語を交えた日常の語を使用する。
- ② 表現が率直である。
- ③ 措辭が弛緩し、諧謔に向かう傾向がある。
- ④ 対句が多くない。

「百一詩」という題が応璩の選んだものかどうかは分からないが、かれの詩のすべてにわたっての総題であり、「新詩」ともいったようで、遺存する断片から察すると、全体は次のようなものを指向するだろう。

- (1) 当時の政治を批評するもの。
- (2) 一般的な政治論。
- (3) ひろく人間へのいましめ。
- (4) 人間の生活の種々相を描写するもの。

かれの詩の率直は魏の文帝曹丕から得、嵇康や晉の陶淵明に伝え、思想詩としては阮籍に、人間を観察した諧謔を含む教訓詩としては、遠く唐代の王梵志や寒山に道を開くだろう。

以上が博士の論旨です。そこでは言及されていませんが、この特異な詩風の發生に寄与するものとして、漢訳

仏典の影響があるのではないでしょうか。

後漢の末頃から、仏典が安世高や支婁迦讖などによって漢訳されたことは、さきに紹介しました。これらの翻訳には、当時の口語的発想と察せられるものが少なくありません。それらは、俗語を交えた日常語を使用し、表現が率直であり、措辞が弛緩し、対句が多くない。つまり、応璩の詩の文体の特徴として数え上げられた諸点のうち、諧謔にむかう傾向を除けば、すべてがここにあります。仏典は個人の心情の吐露ではなく、ひろく人間へのいましめであり、その手段として人間の種々相の描写を含みます。たとえば、

びかびかの鏡の前にたっぷりと紅おしろい  
如新磨鏡盛油器

女の人が顔うつしこつてりとお化粧してる  
女人莊飾自照形

そのうち気持が浮きうきとうわつきはじめ  
於中起生姪欲心

セクシーなすがたかたちがしどけなくなり  
放逸恣態甚迷荒

きちんとした生きかたなんぞうちっちゃって  
追不至誠虚捐法

いろ恋いにくるはくるい身もこがすのだ  
為色走使焼其身

といった偈が支婁迦讖訳の『般舟三昧経』にみえます。これなどは応璩の詩に隔たること半歩といえるのではないのでしょうか。そうして応璩の詩より『般舟三昧経』が先立つのですから、応璩がこの経を読んでいるとすれば、かれの特異な詩は仏経の影響をこうむったと見てよいのではありませんか。曹植が『般舟三昧経』を読んでいるだろうことは、本稿の(八)(九)(一〇)で述べました。応璩は兄の応瑒とともに、曹植の親友でした。曹植

の愛読したものはかれらも読んだと考えるほうが、読まなかったと考えるより自然でしょう。現に応璩はその詩のなかに「坊さん（浮図）」をうたいこんでいるのです。仏教に無関心であったとはいえませんが。

たださきに引いた偈は三巻本にあって、一巻本の対応するところは散文で、意味もすこしずれています。支婁迦讖の訳文がどちらであるかが、この場合大切でありながら決定しにくいのですが、いずれにしてもその偈がひろく人間へのいましめである点では変わりなく、偈であれ散文であれ、そのいましめ的手段として人間の種々相を描写する点でも共通していますから、応璩が仏經を読んでいないことが証明されればともかく、その百一詩の製作には仏典の影響がなにかあったらうと考えるてもよさそうです。

仏典が、俗語をふくむ日常的な率直で弛緩した文体で翻訳されたのは、漢代の訳經に著しい特色ですが、じつは後代のものおおむね同様で、これは釈尊の言語觀に由来する仏教教團の伝統によるのです。

釈尊の弟子に、ヤメールとテークラという兄弟のビクがいました。バラモンの出身で、言葉づかひもよく、声も美しかったです。ふたりは釈尊を訪問して言いました。

「尊師よ、いまやビクらは名を異にし、姓を異にし、生れを異にし、族を異にして出家しました。かれらは自己の言葉によって仏の言葉を汚しています。尊師よ、わたしたちは仏の言葉を雅語に直したいとぞんじます」

これに対し、釈尊は次のように答えられました。

「ビクらよ、仏の言葉を雅語に直してはならない。直せば、懺悔すべき過ちをおかしたことになる。ビクらよ、わたしは自己の言葉で仏の言葉を習うことを許します」

スリランカに遺存する戒律に関する經典がつかえる有名な話（『南伝大蔵經』四卷二二一頁）です。

ここでいう「雅語」とは、バラモンの經典である『ヴェーダ』で使用される言語を指し、これがインドの上流階級の使う言葉で、知識人には地域を越えて普及した一種の標準語だったのです。尊い仏の教えを典雅な言葉で統一し、共通語によって普及させたかったであろうヤメルやテークラの気持はよくわかります。釈尊の教えが、さまざまの土語、さまざまの階級のさまざまな言葉づかいで語られるのを聞いてみると、身分的にも精神的にも上流の人であった兄弟には、耐えがたかったに違いありません。では、釈尊はなぜ、兄弟の申し出を退けられたのでしょうか。

「自己の言葉」とは、直接には、方言、土語、スラングなどを指したのでしょうが、また、ことばどおりの自己の言葉をも指したに違いありません。いまの日本の知識人には、英語、ドイツ語、フランス語くらいは読み書き・しゃべる人がたくさんいます。だが、その人たちが自分自身としゃべるとき、というのは自分ひとりであるときのことですが、ドイツ語やフランス語で考えるのでしょうか。やはり日本語の、しかもそのひとの家で家族としゃべる言葉を使うでしょう。ぎりぎりの事は、生得の言葉でないと、考えにくいものです。釈尊は語学にもすぐれ、あの言語の種類が多いインドですから、教えを相手に応じた言語に翻訳して話されたでしょう。しかし、聞く者にはぎりぎりの気持で聞いてもらいたく、聞いたら心で試し身で試し、そのうえで他の人にも語り伝えてほしいと、思われたでしょう。言葉を典雅にするために、ぎりぎりの気持のほうを削ったり足したりすることは望まれなかったでしょう。それにインドではヴェーダの言葉は下層階級の使用を禁止していたので、ヴェー

ダの言葉に直すと下層の人に仏の教えが遮断されます。それら諸事情を考慮して雅語に直すことを許されなかったのです。この伝統は、仏典の漢訳にも忠実に引き継がれました。翻訳を手伝った中国人のなかには雅語を使い、繰り返しを避け、凝縮した文体を望んだ者もありましたが、西方からの伝道者たちは、俗語まじりの素朴率直な日常語に近い言葉で翻訳しました。初期の漢訳仏典がわかりにくいのは、その俗語や日常語が、後の世の者に分からなくなっているためであることが多いのです。この初期の翻訳法は、中国仏教の最初の組織者といわれる道安（三三六）に賞讃され、以後の訳経の主調となるのですが、それでも典雅を好み、簡潔を喜ぶ中国人の好尚は改めがたく、翻訳もおいおいその方向にむかいます。けれども、それは後の話です。

仏典のなかの偈は韻文であっても、記憶に便利であることを主眼として作成されたので、その文体は素材で率直であり、芸術的結晶は目指さず、趣旨がとどこおりなく伝達されるようにのびやかな、わるくいえば弛緩したものでした。中国人には不思議な感じがしたでしょう。そこに新しさを感じるひとがあってもいいわけで、その有力な一人が応璩だったのでしょう。兄弟であっても、応璩は兄の応場と詩風を異にしたように、同じ仏経から示唆を受けても曹植と違った方向に意図を展開したところが、応璩の獨創性であり、竹林の七賢といわれる阮籍や嵇康の思想詩の先駆となる将来性であったということになりました。ただ、王梵志や寒山の平易率直な教訓詩の「さいしょの源」を、応璩の「百一詩」に認めるか、『般舟三昧經』のような仏経のほうにさぐるかは、あいだに時間の隔たりが多く、はさまるべき条件もあまた考えられるでしょうから、微妙な問題です。

※前号正誤 第一一六号 一三頁 六行 応場（おうよう）↓ 応璩（おうとう）

第一二三号 七頁 九行「この三つに」から一二行「をいう。」まで削除。 一四行 共同体のほうで意識しなくても、個人のほうで「疎外」と意識すること。 ↓ 個人を包み込もうとする共同体の意思を個人のほうで拒否すること、 八頁 一三行 郷土を異物とし、対立者と見、 ↓ 郷土をおのれに対立するものと見、 一〇頁 四行 「失恋とは、おのれの恋がおのれの異物となり対立者となることで、やはり疎外の一種であろう。これよりのち、逍遙にとっては失恋を嘆くおのれさえが、おのれの異物と化してゆく。」を削除。 一四行 南予子の異物として疎外したのだ。 ↓ 南予子の異物としたのだ。 一六行 弟子の異物と見なしたのである。 ↓ 弟子にとっての本質的なものと見ななかったのである。 一一頁 一行 知的郷土もまた逍遙を疎外したのである。 ↓ 知的郷土もまた逍遙の血涙心肝を無視したのである。 六行 疎外感 ↓ 疎隔感 九行 「疎外」の意識化を漢詩でなしとげ ↓ 人間主義と人格の自律を漢詩でうたい 「近代詩人中野逍遙」に関するこの訂正は、高橋達明氏の示教にもとづく。感謝。

春 夢 女 史 小 記 1930 12 21 原 田 憲 雄

一九世紀末の特異な漢詩人中野逍遙の『逍遙遺稿』に見える「春夢女史」が、和歌山県新宮出身の「坪井すむ」という女性であることなどにつき、ことし拙文「春夢女史」を雑誌『燔祭』第三八号に、「徐福の墓―雑誌『青莪』に見える春夢女史の作品―」を同誌第三九号に報告し、本誌『方向』にも関連記事を数回発表した。それら

における女史の身上についての知識のほとんどすべては、『燔祭』を主宰する若林芳樹大人と新宮市立図書館から与えられたものであった。報告にわたしの名を署したのは、文をまとめたこと、ないし文中の誤りなどにつき、その責任はすべてわたしにあることを明らかにするためにすぎない。

さて、大人は十一月二十三日付の手紙でわたしを励まし、新宮市立図書館が、さらに坪井家資料を探查し、女史が後に結婚した宮崎太郎氏とのあいだに文治、マツ、捷、時なる二男二女があり、二女は健在で、故角田三寅氏夫人の時氏が神奈川県茅ヶ崎市に住まわれることなどを突止められた、と告げ、同館から得たメモを同封された。わたしは早速、角田時夫人に手紙をかき、女史研究の意義をのべ、女史ならびにその周辺のことにつき示教を乞い、わたしの報告類を同封した。

このような教えは、求める者にとっては切実だが、求められる方としては煩わしく、迷惑なものであろう。わたしは教えを与えられなくて当然、与えられたら望外の幸いとすべきだと、つねづね考えている。だからこのたびも、返信を切望はしたが、すぐにいただけようとは思わなかった。ところが、十二月十七日、東京都大田区の田中みどり氏からの十四日付の手紙を受け取った。発簡者は女史の長女マツ氏で故田中源蔵氏の夫人、「みどり」はその通名である。以下、「みどりさん」と呼ぶことを許していただきたい。その手紙には、

角田時子はながらく病院生活を致してをりますので、私の方へ回送してまゐりました。と申す私ももう一歩で九十才とて、とても御役にたつ御返事ができそうもございませんが一生懸命にやってみました。この人にきけばと思ふ人が、殆んど亡くなってをりますので、もう少し早かったならと残念に存じます。

とあり、女史の詩文、学生時代の写真などかなりあったが、いま残るのは一部にすぎないこと、しかし中野道遥の女史あて手紙が出てきたこと、などを告げ、別紙にワープロでわたしの質問に答えておられる。わたしは字がへたくそなため人様から読みにくいとよく言われるので、質問事項だけはワープロでうった。みどりさんは、それへの返事はやはりワープロでなくてはと、人をたのまれたのかもしれない。じぶんで打たれたとしても、九十に近い老婦人がキーボードに向かわれるのである。わたしは読みながら感動し、ほとんど絶句した。

もう少し早かったら、というのは、わたしにとっても痛切な感想である。とはいえ現に、女史にもっとも親しい長女のみどりさんがおいでなのだ。他人のわたしがあれこれ推測するより、じかにその手で女史の生涯について書き留めてもらうにしくはない。これをまず、お願いした。とはいえ高齢の方にそのような労働を強いることが許されるかどうか案ぜられる。そこで、女史についての年譜様の冊子をつくり、そこに想い出すことを、ご無理のない程度に、書き入れていただければ、と依頼した。

つぎの返事をもらえばさらに充実した内容になるうが、若林大人や新宮市立図書館の方々への中間報告というほどの気持で、とりあえずこの稿をまとめておく。

みどりさんの回答は、わたしの質問をも明らかにしているので、そのまま掲載し、後に、注釈的にわたしの調べたことを記す。

一、 母（すむ）の祖父玄益が東京に住むようになったのは、いつ頃からなのか分かりません。

二、 玄益が東京に住むようになった理由は分かりません。



- 三、 玄益の東京での住所も分かりません。
- 四、 玄益が死去した東京市本郷区本所石原町の家が、柳田はまの家と同じかどうかともよく分かりません。
- 五、 玄益の妻の名も分かりません。
- 六、 蜂音庵の妻の名は「香」と聞いています。
- 七、 翠松院梅顔智香大姉は「香」の字が入っているので祖母香のものと思います。
- 八、 蜂音庵の法名は分かりません。
- 九、 母が東京で勉強するようになったのは、七く八才のころと思います。
- 一〇、 母の東京での住いは、現在の女子学院の前身桜井女学校（校長は徳富蘇峰の伯母矢島女史）の寄宿舎でした。
- 一一、 当時桜井女学校には外人教師も数名居りましたので英語も学び、英学の卒業証書も残っています。
- 一二、 東京で入学した学校は前期のとおり桜井女学校です。
- 一三、 東京・新宮間を往来するのにどのような交通機関を利用したかは分かりません。
- 一四、 東京で勉強したのは、桜井女学校（卒業時は女子学院）の明治二四年六月三〇日付の卒業証書がありますのでその頃までと思います。
- 一五、 中野逍遙から漢文を学んだかどうか分かりませんが、詞友として交際していたように聞いておりますので教えられたことも多かったことと思います。

- 一六、 学校の夏休みに佐々木信綱先生のもとへ和歌を学びに通ったといふことは聞いています。
- 一七、 桜井女学校卒業から結婚するまで甲府の山梨英和女学校（東洋英和女学院の山梨分校）で教師をしておりましたが、はっきりした期間は分かりません。
- 一八、 母のその他の職歴はよく分かりません。
- 一九、 雑誌「菁莪」に発表したことも今回初めて知ったくらいですのでその方面のことは一切分かりません。
- 二〇、 母が死去したのは昭和二十一年一月九日です。（七四才） 法名は戒山妙悟大姉です。
- 二一、 父宮崎太郎は東京府の出身で、生年月日は明治四年一月四日、昭和四年三月二四日死去しました。
- 二二、 父は、明治二四年札幌農学校（ほかに、明治四三年東京外国語学校卒業）を卒業し、その後群馬、茨城、山梨、広島等各県立中学校で英語を教え、その間日本赤十字社、中支那派遣軍等の通訳官、東京日蓮大  
学講師（現在の立正大学とします）も勤めました。
- 二三、 父の詩・文の著作は特にありません。
- 二四、 父と母は、太郎の継母が母の伯母であった縁から結ばれたと聞いています。
- 二五、 夫婦間の子は長男丈治（文治ではありません）、長女（田中）マツ、次男捷、次女時の四人で長男と次男はすでに他界しております。
- 二六、 田中マツの住所は東京都大田区（以下一〇字は転記を遠慮する 意）です。
- 二七、 角田の読み方はツノダです。

二八、母から中野逍遥の名前を聞いたことはありません。現に逍遥遺稿（明治二八年十一月発行のもの）なども残されています。以上

簡潔で明瞭である。わたしは先師大塚五郎先生の松子夫人が一八九九年生れで、その文章や話し方の簡浄なことに驚いているが、同じ世代の、やはりマツを名とする、みどりさんの文章にも感心した。

さて、文中の女学校などについてわたしはまったく無知なので、京都市立中央図書館にゆき、全国学校名鑑といった種類の本を繰って、「山梨英和学院」をみつけた。甲府市愛宕町にあり短大・高校・中学などを総合している。「桜井」という学校は茨城県石岡市にあるが、これが明治の桜井女学校かどうかはわからない。たまたま唐沢富太郎編『図説・教育人物事典』（ぎょうせい・一九八四年刊）を見たら、矢島楯子・桜井ちか子・新海栄太郎の項目に求める記述があり、そのうえ女史の叔父にあたる坪井仙次郎についての大項目までみつけた。思いもかけない収穫である。それらの項目にはいずれも（唐沢）と署名がある。富太郎氏がみずから執筆したのであろう。以下のわたしの注釈的記述のおおくは唐沢氏の解説の節略で、

写真も同書からの転載である。



坪井仙次郎

坪井仙次郎（二八五—一九四五）は武蔵新宮（東京都）で藩医師坪井玄益の次男として生れた。玄益の「長男」が蜂音庵を指すのか、あるいは別に長男があつて夭折したのかはわからぬが、藩士としての玄益は、医師の後継者をつくつておく必要があり、娘の香の婿として蜂音庵を迎

え、養嗣子とし、その後に仙次郎が生れたのかも知れぬ。

仙次郎は一八七〇（明治三）年、一七歳、慶応義塾に入学し、二年後、義塾教員となり、翌年、義塾大阪分校教員となった。一八八〇年代には京都師範学校教諭として京都府教育会の改革に努め、一九〇一（明治三四）年、創設された大阪市立市岡中学校の校長となり、四年後、同府立岸和田中学校の校長に転任、その他、各地の師範学校の教員・校長を歴任した。教育関係の著書が多く、春夢女史の生れた二年後の一八七五年に「女子に告る文」を『民間雑誌』九編に発表している。蜂音庵が娘のすむを七、八歳から手離して東京で勉学させたのには、仙次郎の教育思想とも関わっているかも知れない。



桜井ちか子

桜井女学校は、桜井ちか子（一八五一—一八八〇）が創立した。ちか子は江戸日本橋で、徳川幕府の御用商人平野家に生れ、幕末に一家破産し、商店を開いたが失敗。一八七二年、一八歳、海軍士官桜井昭恵（あきのり）と結婚した。夫はちか子に英語を学ばせた。ちか子は熱心に学び、二年後、キリスト教新学教会で洗礼を受け、一八七六年一月、麴町区中六番丁に桜井女学校を創立し、校長となった。後に発展し、幼稚園から高等女学校までを総合して、英語・習字・漢文を中心とする教育をなした。夫の昭恵もクリスチャンとなり一八八〇年、士官をやめ赤心社委員として函館に赴任するにつき、ちか子は校長をやめ、後をトゥルー夫人に委ねた。この年は坪井すむが七歳で東京に行ったとするとその前年だから、すむが、すぐに桜井女学校に入ったとしても、ちか

子に学んだのは、一年か一年半ぐらいであろう。

みどりさんの回答にみえる「矢島女史」とは矢島榊子（やしま かじこ 一八三一—一九二五）である。

一八七〇年代に西欧文明輸入の波に乗って一躍時代の花形となった英語の学校として、多くの上流婦人や進歩的な女性を集めていたのは、桜井女学校と新栄女学校であり、この二つの学校を合併して「女子学院」と改めたのが矢島榊子であった。



矢島榊子

彼女は肥後国（熊本県）の大庄屋の七番目の子として生れた。九州は武を尊び、男が生まれると喜ぶが、女が生れると嘆く土地柄。矢島家は長男以外は女で彼女が生まれたとき父は名をつける気にもならない。姉たちが、男に負けないようにと「勝子」という名を付けた、という。二〇歳で結婚し四人の子ができたが夫は大酒飲みで苦勞がおおきく、片目がほとんど見えなくなった。一八七一年、発心し、榊子と名を改め、上京して神田猿樂町に住み、教員講習所で学び、小学校教員となったが、「辛苦して小学教員となっても、十円前後

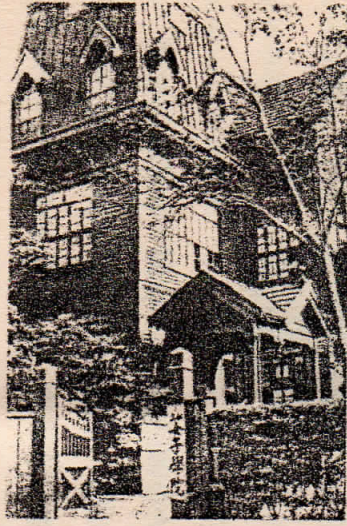
の給料では独立の地位は保てない。英学を婦人に普及し、見解を広げ、活動の道を開かねばならぬ」と考え、築地の新栄女学校に入り、英語を学びながらトゥルー夫人を助け、同校の幹事役を勤めた。次いで桜井女学校に転任し、一八九〇年、桜井女学校と新栄女学校とが合併し、女子学院となった。榊子は「女学校生活」にいう。

私の目的は…英語を早くより一般の女生徒に練習させたいのにありますが、余り幼少からだ英語のほうが

覚へよいために日本の普通学が粗になり全然西洋人化して仕舞ふ弊害がある。又年を取過れば容易く習練致しにくい。先づ十一、二歳から十分に仕込むのが良法だと思ひます。

「女子教育の方法」は一九〇三年に発表されたものだが、すむが学んだころの桜井女学校女学校の教育も同様であつたらう。唐沢氏の要約によれば、次のようである。

女子も男子も平等に教育を授けて同じ目方（見方？）にしなければならぬ。それゆえわざわざ女子のみを抽出してきて、これが女子教育の方法であるというようなことは欲しない。もちろん男子と女子とは天性を異にしているから、おのずから適・不適の学科もあり、教育者の用意も男子と違えなければならぬので、学校を別に



女子学院

する必要も起こるのであるが、教育そのものの精神からいうならば、決して区別すべきものではない。女子といえども男子の受けるだけの教育がなければならぬのであるから、何でも人並みに学ぶことがよい。教育によって人格を養い、知識を高め、嫁しては良妻賢母となるのであるが、賢母といつても、大人物を作るだけの力がなければ真の良母ではない。そのために教育が必要である。体操を奨励するについても、体操ばかりを目的にしてはいけぬ。身体を丈夫にするのは朝夕の立ち働きにあるのであるから、体操さえすればそれで体育の目的が達せられると考えるのは大きな誤りである。例えば科学を学ぶにしても、あながち本式でなくともよい。朝夕の食膳に注意して、理化学で学んだことを実際に応用し、日常の調理の技を

鍛練することが肝要である。女子に職業がもつとも必要である。権利は道徳に属するものではなく、金銭すなわち富に属するものであるから、女子の権利を拡張し、女子の権利を保つてゆくには、どうしても職業がなければならぬ。

次に女子学院の塾舎の生活が紹介してある。これまた桜井女学校時代も同様であつたらう。

この塾舎には一二歳から二三、四歳の塾生がおり、予科四年、本科四年、高等科二年である。塾生の組合せは、九畳に四人、六畳に三人、四畳に二人と定め、なるべく塾生の望みに任せた。同級生は、互いに研究したり、同じ参考書を用いる都合のため、同室が便利であり、同郷の者どうしは自然に友情が厚く同室を望むというようなことから、希望を尊重したのである。しかし監督者は放任はせず、ほどよく組合せを調和し、各室には年長者を入れて室頭とし、年少者の世話をさせた。会計係をおき、給仕当番を定め、係は朝六時に起き、七時半までに食事と後始末を終り、勉強室に集まって感謝の祈りをささげる。昼は一一時半から昼食。午後三時二〇分、授業が終り、後は随意に運動し、五時に食卓につくという日課であつた。

矢島の教育方針は、できるだけ社会との接触を重視しようとするものであつて、箱入り娘を作ることには反対であつた。生徒を箱入りにして閉じ込めておくのは、監督者にとっては世話はかからないが、学校を出てから役にたたず、又過ちが起こりやすい。それゆゑ、できる限りどこへでも行って見学させ、何の演説でも聴かせてやることにしていた。その代り外出のときには、守るべき注意だけは十分にあたえておいたのである。日曜日は、午前は教会に出、午後は自由にさせた。教会の礼拝は強制ではなかつたが、たいていは矢島とともに参加した。

以上である。中野逍遙の小説『慈淚余滴』の「少女」がすむだとすれば、「溫柔従和」の質であった彼女が、このように自由で規律のある教育を受け、そのなかで「進取剛健ノ風ヲ帯ビ秀慧機敏ノ才発シ」祖母の死によって「精確卓牢ノ節ヲ見ル」にいたったのかもしれない。箱入り娘を作り上げる式の学校であつたら、未婚のすむが逍遙と詞友として交際することなど、とうていできなかつたであらう。

春夢女史が、教員として勤務した山梨英和女学校は、新海榮太郎（しんかい えいたろう 一八四一—一八七五）が創立した。かれは山梨県巨摩郡玉幡村の素封家に生れ、一八八二年、一九歳、自分の村に立園義塾を起こした。六年後、キリスト教徒となり、同教の男女平等に学ぶべきことがあるのを痛感し、県下に女子教育機関が不備であることを嘆き、判事宮腰信次郎などの同志とはかり、資金を集め、一八八九年四月、甲府市にひらいたのが山梨英和女学校である。かれは校主となり経営を担当し、校長にはカナダ・メソジスト教会婦人宣教師団のミス・ウイントミューを招き、キリスト教主義に基いて教授訓育を行うことにした。市内の太田町の民家を借りて、六月一日、開校式を行なつたが、入学者は七名であつた。翌年は一五、六名となり、おいおい増え、一八九一年一〇月には市内飯沼村西青沼に校舎を建て、教室、寄宿舎、教員住宅、その他の施設も整い、一八九七年前後から生徒数が一〇〇名を超えた。ウイントミュー校長は、規則と時間を守ることと、偽りのない正しい生活をするをもっとも厳しく教えた。一九〇一年に卒業した寺田秀子は、当時の寄宿舎はなかなか規則が厳しく、最初はずいぶん窮屈だと思つたが、慣れたら規則正しい生活は本当によいと思つた、と述懐している、という。

春夢女史が教員として勤務したのはこの前後であり、寺田秀子は、その教え子のひとりであつたらう。